

発達心理学編 幼児期

全13巻

監修●東京都立大学名誉教授山下俊郎 制作顧問●静岡大学教授岡野恒也
■時間:各巻 約20分

1 運動機能の発達

〈指導〉鹿児島大学 島田俊秀

●白黒

乳幼児の運動機能の発達は精神発達にとってきわめて重要な役割を果たしているばかりでなく、両者は共通の原理に従って発達する。また運動機能は誕生から成人にかけて連続的に発達するが、それには定型的順序と特徴がみられる。これらの定型的順序に従って発達する年齢的段階の中の新生児にみられるバビンスキー反射、把握反射、モローの反射、自動歩行および吸いつき反射などの反射運動。

首が座り(3～4ヶ月)ハイハイ(7～8ヶ月)支え立ち(11～12ヶ月)ひとり歩き(15ヶ月)、更に6歳にいたる全身運動と、頭部から尾部へ方向に従って発達していくが、これらの運動能力を測定する体力検査の方法が描かれ、更に手先の動作の発達過程などを、生後3ヶ月頃から1歳過ぎまでを順を追っていき、2歳から5歳までの日常生活の特徴がとらえられている。

2 認知の発達

〈指導〉東洋英和女学院短大 丹羽淑子

●白黒

人の認知発達の過程を知るために、出生直後から一年間の発達の過程を5項目にわたって記録したものである。①新生児の感覚には内受容感覚、外受容感覚、自己受容感覚の領域があり、内受容感覚の眠り、目覚め、泣き、あくびなどは植物性器官によって生じ、自己受容感覚は体の平衡反応や姿勢と関連し、外受容感覚は体外の刺激によるもので、見る、聞く、機能は未熟で、主に、光、振動音、味、匂い、温度、接触など近感覚の働きである。

②赤ん坊は口で外界を認知する。口辺の触刺激と平衡感覚によって頭を回転させる探索反射や吸啜反射などがそれである。

③目による認知の発達、これによって積極的に外界の探索が始まる。④外界認知への手の参加、把握反射の視覚的統制や単線的活動から複線的諸活動、さらに⑤対人知覚の発達などを総合的にとらえたものである。

3 思考の発達

〈指導〉明星大学 飯島婦佐子

●白黒

子供の思考の発達過程をさぐり、合わせて思考の発達過程に働く要因を分析しそのメカニズムを知ろうとしたものである。その主な項目として、思考の発達の過程があげられ、「活動」から「象徴機能」の発達が取り上げられる。出生直後の乳児は「活動」を中心として周囲の世界に働きかけ、それを自分の中に取り入れている。また、乳児自身が周囲の世界に合わせて行動する。このように、人間は生まれつき能動的な存在であることをファンツの実験例を示して考察したほか、唇、手などによる活動によって能動的に周囲の世界に働きかけ、それが取り入れられていき、更に、「象徴機能」の発達によって複雑な世界への適応も可能になるものである。その他、発達の規定や要因や言語との関連など、多角的な実例が描かれている。

4 言語の発達

〈指導〉国立国語研究所 村石昭三

●白黒

赤ん坊が、うぶ声を発して生まれてから母国語としての日本語を発するまでには約1年を経過する。そして就学までに言語を操作して、言葉でものをとらえ(認識)、考え(思考)、伝え(伝達)、また、つくる(創造)等の諸機能の基礎を獲得して真に「言葉を使う人間」として成長する。この作品では、それらの獲得、ならびに学習の諸条件を詳細に追跡し具体的に描いたものである。

5 幼 児 の 絵

〈指導〉 聖心女子大学 岡 宏子

●カラー

「子供の絵はその心の鏡である」。言い古されてはいるが今日もなお生きた言葉であることには変わりない。しかし、その絵が子供の心の何を語り、どんな心性の表現なのかという点になると、これはかなり複雑な問題を含んでいるし、また研究者の議論の分かれる点も少なくない。このような問題点も含めて、幼児の描画活動の発展的展開とそのメカニズムを通じて〈幼児の心〉の表現の種々様々を探ってみた。

6 情 緒 の 発 達

〈指導〉 聖和女子大学 黒田実郎

●白黒

誕生より就学前期までの情緒の発達とその分化の過程を明らかにし、正しい情操教育のためには子供の情緒的問題をどのように取り扱うべきかについて、視聴者に示唆を与えることを、この作品の目的とした。特に、子供の健全な情緒発達にとっては、愛情に基づいた適切な人間関係が必要であることを強調しながら問題を展開していく。

7 興 味 の 発 達

〈指導〉 筑波大学 大内茂男
東京家政大学 中地万里子

●カラー

幼児期における興味の発達的变化を知るために、乳幼児期を四段階に区分し、それぞれの年齢段階における子供の生活を、具体的に、しかも色彩的な要素が必要なためカラーで記録したものである。

興味は、人間の自発的活動の源泉として重要な役割を持っている。特に、精神発達の未分化な幼児期においては、生活のすべてが、直接彼らの興味に支配され、具体的に方向づけられてゆく。従って、興味のないところには活動がなく、逆に、その活動を見れば、彼らの門前の働きである興味の実態を知ることができる。興味は、その発達にともなって変化していくのである。

このように、興味のめばえ、身のまわりの探索行動、身辺に対する興味のひろがり、興味の性差、個人差などを取り上げ、その発達の過程を描いたものである。

8 社 会 性 の 発 達

〈指導〉 女子聖学院短大 田中熊次郎

●白黒

われわれの社会は共同生活によって成り立っている。そして、その根底は人間個々の社会性によってそれぞれに変容する。そのような人間の社会性が、どのように発達するのか、その発達の過程などを、外面的には乳幼児の行動を観察することからはじめ、内面的にはソシオメトリック・テストの技法からその概要を解明しようとしたものである。そのための方法として、幼児期にはじまる社会的反応、幼児期における社会的行動の発達、集団の中での社会性の発達などを描いたものである。1歳半から2歳に見られる社会的無反応、2歳頃の受動的な社会的反応、2～3歳頃の平行的な社会的行動、3歳頃の追従的または支配的な社会的行動、3歳～4歳までの2人連合の社会的行動、4歳頃の低い程度の連合的社会的行動、4歳～5歳頃の高い程度の連合的社会行動、5歳頃の共同的社会行動の始まり、などを克明に描写した。

9 幼 児 の 遊 び

〈指導〉 玉川大学 日名子太郎

●白黒

遊びは、動物、人間とを問わず、大変意味のある活動である。特に人間の幼児期においては、その心身の発達にとって重要な意味を持った活動である。

プラント以来、哲学、美学、心理学その他あらゆる分野でその意義や価値が考えられている。しかし、よくみるとその遊びの中にも、衝動遊び、模倣遊び、鑑賞遊び、機械遊び、などの段階に分類することができるほか、男児と女児の違いなど、いろいろな角度から、遊びの内容を研究することによって、その本質やその遊びの持つ意義が納得される。しかも遊びの持つ意味や価値についても、ごっこ遊びや役割遊びなどのように、周囲の大人の生活を模倣したものが多いのは、彼らの眼から見た大人たちの生活の中のきわめて誇大なものに対する反射とみるべきではないだろうか。そんな実景を展開した作品である。

10 家族関係

〈指導〉 東京都立大学 三浦 武

●白黒

家族とは幼児にとって何なのか。幼児の思考の中の家族関係発達のプロセスはどのような形態をとって発展してゆくのか。そのいろいろな要因を考察したものである。

狼に育てられた子供の実例から、乳幼児期の幼児と母親との関係の重要性を考え、ついで心理学者ハーローの、赤毛ザルの赤ちゃんを使った実験でみられるように乳幼児にとって、母との肌と肌とのふれ合いがいかに大事なことであるかが語られる。また、毛布などをペットとして、はなさない乳幼児期の行動などが都市生活家族の中の乳幼児に見られることなども紹介されている。さらに、東京家政大学の大滝講師が実施した、親子の相互作用の実験的研究を紹介しながら、親のしつけ態度がどのように子供に影響するかを、ラトケ、マーフィーなどの研究実績とともに描いている。

11 基本的習慣

〈指導〉 大阪樟蔭女子大学 西本 脩

●白黒

食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔、この5つの基本的生活習慣の形成は、幼児期にするのが標準となっているが、親のしつけ方により習慣づけの遅速に相当なひらきが生じ、依存的性格、自主的性格などのパーソナリティ、あるいはキャラクターの違いもできてくる。この作品は、幼児期にはじまる個々の基本的生活習慣のしつけの具体的内容と、しつけの方法についてを明らかに描いたものである。

12 人格の発達

〈指導〉 お茶の水女子大学 浅見千鶴子

●白黒

人格の発達とは幼児期における心的要因が基盤となって形成されていくものであることを動物（日本ザル）の飼育実験によって確かめながら、生理的刺激に対する乳幼児の感受性や初期体験の重要性を実証する。日本ザルの幼児を、生まれてすぐ母親から離し、1頭だけで飼育すると、体ゆすりとか跳躍運動、自傷行動等の常同運動をするようになる。人間の幼児の場合にも養護量が不足した施設収容児などに見られる。人間の新生児も、動物と同様に、本能的な生活をはじめますが、次第に周囲の人々の生活に合わせるように、しつけを受け、食事、排泄、着衣などの基本的な習慣の与えられ方によって人格形成が異なってくるほか、3歳児頃から反抗期に入らなくなり、友達を求めるようになることなど、人格形成のプロセスをとらえたものである。

13 情緒障害

〈指導〉 和歌山大学 橘 英弥

●白黒

子供の精神的な発達にとって不可欠なものである人と人との関係、事物との関係を中心に、その関係の障害として、問題となっているいろいろな情緒的障害を描いたものである。

人間は、その環境の中で、たえず対人間的な影響を受けながら成長する。情緒の発達といわれるものも、そのような環境と対人間関係の中からこそ、正しい価値のあるものが生まれてくるのである。従って、子供の情緒障害を理解するためには、子供の生活の中で、情緒の発達を妨げている対人関係や事物の関連を考える必要があり、その治療や予防などについては、その環境を子供に適したものに変えていくほか、保育施設などでの関係調整等が行われなければ情緒障害を取り除けないことを実例をもって示した作品である。

・お問合せ・お申込みは

(映) 有限会社 博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

【HP】 <http://hakuei-shoji.jp>

【E-Mail】 info@hakuei-shoji.jp